



感動と涙の結婚式



張慧さん三國一の花嫁姿

さわやかな秋晴れの11月23日、正会員の張慧さんと難波諒さんの結婚式が催されました。新婦の張慧さんは北京第二外国语学院でイメイトの世話役を担当。卒業後、桜美林大学大学院に留学し、アルバイトとしてアジア事務局を手伝い...

九大留学中の3人の清華大生を訪ねて



黒瀬さんと3人の留学生

穏やかな日和の十一月二十一日。場所は彼らの宿舍である九州大学国際交流会館(福岡市東区)。それは「やあ、お久しぶり」と言って軽く手を挙げて旧友と挨拶を交わす時のような和やかな彼らとの出会いでした。彼らはにこやかな笑顔で私を迎えてくれました。実は彼ら3人と会うのはこの時が初めて。劉偉権さんとは既にイメイトとしての交流があり、昨年末に北京に行った際に電話で話したことがありましたが、李莞荷さんと詹曼さんとはこれまで何もご縁なし。彼らと話ができただけは私の日程の都合もあって僅か3時間でしたが、近所のショッピングモール内の日本料理店での昼食をささみながらの楽しい交流でした。

「清華大学創立百周年」記念にプーアル茶 磐村文乃先生

清華大学では、一月中旬から一ヶ月ほど冬休みになります。帰国のたびに、「今度は何を土産に持ち帰ろう」と頭を悩ますもの。今回も大学構内の記念品店を巡ってみました。大学名入りの手帳やペンの文房具を始め、水筒や茶器、カレンダー・地図付キットランプなど、定番商品も要チェックです。正門にある大学直営店は常に賑わっています。観光・写真スポットになっている清華園(二校門)付近には、昔ながらの四合院造りの建物に「清華大学記念品販売サービスマン」があり、こちらが本部の模様。11年の創立百周年記念品の販売棟も設けられ、記念切手やコイン、超高級な陶器や飾り物からバッチャキーホルダーなどの小物まで展示・販売されています。



記念に何を買おうかな

最も心引かれたのが中国ならではの黒茶・普洱茶。昨今の健康ブームで、成人病予防やダイエット効果のある黒茶・普洱茶が人気。長期保存するほど味わい深く、健康効果や価値が高まるとあって記念品や贈答品としても重宝されているのです。大学のロゴ入り、丸く円盤状に固めた普洱「餅茶」は熟茶と生茶セットで4800円、黒茶(龍团老樹茶)はなんと13800円!餅茶なら・と購入。いつか皆様とこの記念茶を飲みながら、11年に清華大学で過ごした日々を思い出せたらと思います。祝各位新年快樂!

(中国・清華大学派遣教師)

日本語の夕べ

藤原美代子先生

十一月のハノイは、猛暑が去りまだ寒くはなくベストシーズンと言っているでしょう。観光にはもちろん様々なイベントにも適しています。大学でもいろいろな行事が行われました。十一月五日に貿易大学で二年に一度の「日本語の夕べ」が開催されました。日本語部と日本語クラブの共同開催で、準備段階から学生たちが大活躍でした。日本語を生かした舞台発表です。今年は大災害を乗り越えようとする人々の姿から学んだ人の絆の大切さをテーマに「ともに手をたずさえて」のタイトルとなりました。貿易大学の日本語を学習しているクラス、グループ、個人、他大学の学生、高校生までが出演にエントリーしてきます。本番二週間前に審査会がありました。歌、ダンス、劇、ミュージカル、とそれぞれに工夫をこらした演目です。すべて日本語で発表、日頃の学習の成果と日本への関心の深さを感じさせるものばかりで、ほとんどの演目は合格でした。審査会では、個々のグループに対して審査員の教師から本番に向けてのアドバイスをいたしました。その後、日本人教師による台本の日本語チェックがあり、本番へと進みました。当日は体育館に本格的な音響・照明のステージが設営され、スポンサーも招待して盛大な発表会となり、学生のパワーが再認識できました。



「かくや姫」をアレンジした「竹姫」

先日の大鐘町のボランティアにも参加し、大活躍をしました。結婚式はなんと神式。雅楽の優雅な演奏が始まると、羽織はかま姿の諒さんに続き白無垢姿の慧さんがしずしずと登場。我が娘を嫁に出す母親の心境になり目頭が熱くなりました。披露宴では、アジア風のテーマソングを歌っている歌手の金井優佳さんが歌のプレゼン。何年前かに北京で歌って好評だった「同一首歌」を当時慧さんに教わった中国語で披露。次いでお二人のリクエスト「ありがとう」の熱唱に一同胸が熱くなりました。続いて上理事長代行が、異文化交流も夫婦間の交流も「ハッピーミディアム」が大事と祝福の言葉を述べました。式の終わりに慧さんが今まで育ててくれた御両親に涙ながらに感謝の気持ちを述べ、青海省から参列したお父様が新郎新婦に次の六つの言葉を送りました。「誠心孝心 愛心熱心信心放心」もちろん中国語ですが、日本語訳が事前に用意され、参列者一同感動で胸がいっぱいになりました。最後に慧さんから、アジア風の皆様に、感謝の気持ちと、今後とも末長くお付き合いさせていただき、是非伝えてほしいとの伝言がありました。(理事 藤原玲子)

(ベトナム・貿易大学派遣教師)

NPOアジアの新しい風の皆様

タマサート大学教養学部 日本語学科一同

このたびのタイの洪水では、世界遺産のあるアユタヤ県を中心に多くの被害を受けました。避難者を支援するために、タマサート大学はランシットキャンパスを臨時避難所とし、学生たちにボランティア活動に協力してもらいましたが、4千人の避難者を受け入れていたこの大学もやがて洪水に襲われることとなりました。その折、Dai-iki Sae-ki という方からの「心の財だけは絶対に壊れない」というメッセージが込められた動画がタイのテレビで流れてきました。TAEKOさん作曲の「ヒマワリ」をバックミュージックとして、日本の石巻市の方々の応援メッセージが印象深かったです。日本大使館や、国際協力機構(JICA)を通じて日本からの支援物資が届き、また、温かい励ましのお言葉をいただき、とてもうれしく思いました。混乱状況にあったバンコクもお陰様で徐々に日常生活に戻りつつあります。国王誕生日の翌日、12月6日には学校が再開できるように復興作業でみな必死でした。タマサート大も新年早々に授業再開の見通しです。この度皆様よりいただきました御見舞金は、教養学部を通じて日本語学習に励んでいる学生達に必要な書籍、視聴覚教材の整備に使わせていただき、日本とタイの友好関係を築くための人材育成に役立てていきたいと思えます。心より感謝を申し上げます。

《編集部注》派遣教師の三角友子先生が一人上の都合により前期をもって退職されましたので、准教授のタサニ先生にイメイトの事務局をお願いしています。



タサニ先生

会員紹介

岸本 圭司さん

ボランティア古希人

「ボランティア」として6月初めに岩手県大槌町を訪問されました。あれから半年、改めて今の心境は如何ですか? 「津波の現場を見て、自然の破壊力のすごさ、跡形が無いのです。俳句を始めたので、何か読めるかな、と思ったが、句に読めませんでした。悲惨さが強烈だったので:」

被災者の印象は?

「東北人特有の心の強さを感じた。話を聞いて暗さがない。こちらが暗くなっちゃう中で:。我々に対して気遣いがあったのでしようが:。大変な悲惨を体験したのに涙はない。淡々と被災の状況を話される。努めて明るく振舞っていらした。強い」

「昨年7月正会員の奥さんに誘われて、留学生の送別交流会で高尾山登山を引率、昨年1月のタイ・タマサート大学訪問と積極的に活動に参加。昨年4月、アジア風に入会、正会員となり現在タマサート大、ハノイ貿易大の2名とイメイト交流中」

イメイト学生との交流は如何ですか?

「タマサートの学生は日本語の経験があつて日本語は達者。週一回の文通時には日本の諺を2・3解説付きで触れた。秋、洪水で休校だったのを利用して彼女は訪日。その時、少しでも日本人の心を知ってもらおうと『歳時記』を贈った。ベトナムの男子学生は、まだ、たどたどしい日本語ですが、将来、経済人を目指しているの、役に立てればと思っています」



(大手銀行退職後は地域ボランティアに多忙。)

▲町会副会長兼会計担当として催しの運営 ▲高齢者への支援活動(ゴミだし、買い物代行、病院同行、庭木の剪定など)の会を創設 ▲山登りの会発足。他に趣味は地元で俳句、碁、登山にも挑戦

企業関係から地域貢献ですね!

「気が多いですね」

「今の心境を俳句で:。『碁に集ふ、我ら古希翁、木守柿』(木守柿は次の芽出しを託して残す柿の意、類稀なボランティア古希人でした。)

(インタビュアー 編集ボランティア 園木宏志)

菜種梅雨 子に残すもの 無くなりぬ

この俳句は、大槌町安渡の小国チエ子さんが震災後詠まれた句で、今年度上期俳句部門で見事に受賞され、「いわて文園」の新聞紙上に掲載されました。その紙面によると、小国さんは短歌や俳句の趣味があり、昨春秋にそれまで「文園」に載ったものなどをまとめて小さい句集を作られたのです。その大事な句集が「子に残すもの」であり、それがあの震災で流されて、菜種梅雨のようにじめじめした気持ちが残っている、と心情を詠われたのです。そして不安もある中、これからも来し方行く末に心を巡らし、子らに残す宝物を求めてまた言葉をついでいこうと思つていらつしやるようです。



小国さん提供

(小国さんは、アジア風で訪問した際、こちらが企画したミニコンサートでハーモニカ演奏もしてくださいました。力強く進もうとする姿勢に感動し、ご紹介させていただきました。)

(イメイト会員 芦田順子)

大槌町との交流

大槌町ボランティアに参加したとき、避難所生活の中で、趣味の手芸を始めた人に出会いました。ボランティア団体「ゆいっこ」のかたとその人のやり取りを横で聞きながら、私にできる事があるかもしれないと思いました。その人、戸沢多賀子さんにお話しを伺うと、瓦礫の中から錆びた鉄をみつけ、身近にあるもので、細々とした物を作つて人にあげ、喜ばれているとのことでした。それで、今どんな物があるのかを書きだしていただき送ることにしました。帰ってから、近所の友人に声をかけ、戸沢さんから託されたメモにそつて、買い求めたり、持ち寄ったりして荷造りし、「ゆいっこ」を通して戸沢さん宛に送りました。荷物を受け取ったとの手紙から数か月後、仮設の集会所で仲間と手芸作品を作り、近々販売されるとの嬉しい便りと作品が送られてきました。暖かな贈り物でした。



大槌からの贈り物

(イメイト会員 藤田千寿枝)